

## 発表要旨

「モーツァルト in 聖徳 2006」の序章として、本年3月に聖徳大学生涯学習講座でピアノ音楽を中心に扱ったが、その時行なったアンケートをもとに、モーツァルトの音楽が聴き手にさりげなく、心地良さを伝える秘密を探る。

モーツァルトの作品は、持ち前の明るさ、軽快なリズム、親しみやすさ等、さらりとした表現で聴衆を心地良くさせるが、ウィーンに住むようになってからの人生が、彼の音楽に与えた影響は大きいと考えている。例えば、ヴァン・スヴィーテン男爵との出会いによりバッハを知り、フーガを研究したこと。半音階を取り入れ、心の襞を音に託したこと。さらに対位法の音楽を16分音符の連続や歌うアレグロで覆ってしまい、聴き手にさらりと流し、耳に心地良く聴かせてしまうこと。モーツァルトの音楽が人々を魅了する所以は何であるかを考える。

市民の中のモーツァルト

～人々を魅了するモーツァルトの音楽～

「モーツァルト in 聖徳 2006」国際シンポジウム

聖徳大学教授 原 佳大

私は、1984年から86年までウィーン国立音楽大学で勉強致しました。卒業後も研究のため、また、マスタークラスや、演奏会のため、たびたび渡欧してきました。ウィーンは、私にとって第2の故郷であり、人をほっとさせてくれる街です。

モーツァルトの時代、オーストリアはマリア・テレジアがハプスブルクを治めていた全盛期でした。、当時、ウィーン1区は、城壁に囲まれていました。現在は城壁はありませんが、昔と同じ建物がたくさん残っています。通りの石畳を歩いていると、馬のひずめの音や馬車の軋みの音が聞こえ、18世紀の雰囲気が残っています。

1区の中には、モーツァルトの住んでいた所が沢山あります。私は留学していた頃からその1つ1つを訪問し、彼の足跡を追ってみました。Domgasse、Am Hof、Singerstrasse、Milchgasse、Rauhensteingasse、Wipplingerstrasse、聖徳大学に自筆譜のあるアントレッターセレナードが書かれたと思われる Tiefer Graben 等、滞在したり演奏したり作曲した場所のプレートをさがして歩き回りました。

帰国後、1991年、日本モーツァルト愛好会から、「モーツァルトのピアノソロ全曲演奏会と、お話をしてください」との依頼が来ました。

1992年から97年までの5年間、11回の演奏会を行い、モーツァルトのフラグメントを含む全ピアノソロ曲を演奏しました。その間、1つ1つの曲について調べ、資料を集めるためにウィーンやザルツブルクに何度も行きました。

それは、断片はなぜ、断片に終わっているのか？モーツァルトの作風は、なぜ変わっていったのか？などを知りたかったからです。また、世に知られていない曲もたくさんありました。

演奏依頼のあった1991年は、モーツァルトの没後200年で、ベーレンライターから新モーツァルト全集が出版されました。自筆の筆跡研究をしたヴォルフガング・プラート、また、自筆譜の透かし模様にX線をあてて作曲年代を推察したアラン・タイソンの研究により、いくつかの従来のデータがくつがえされました。成立年代の修正がありましたから、私自身それらを確認しながら研究をしなければなりませんでした。

研究の助けとなっているものにオペラがあります。

私はオペラが大好きで、国立オペラ座で、ドン・ジョヴァンニ、フィガロの結婚、魔笛、コシ・ファン・トゥッテ、後宮からの逃走等のオペラをよく見にいきました。オペラから得た靈感は、演奏する上で大きなヒントとなっています。

私は、これまでに、モーツァルトの講義をしばしば行ってきました。

今年はモーツァルト生誕250年にあたり、聖徳大学で「モーツァルト in 聖徳2006」というプロジェクトを企画しました。今年の3月、私はこのプロ

ジェクトの序章として、聖徳大学生涯学習講座において、「モーツァルトの手紙」を使つての講座を5回シリーズで行いました。

「なぜ、手紙が重要なのでしょうか？」

私達が生のモーツァルトの声を聞きたいと思つたとき、現存する資料として、楽譜と手紙、ケッヘル目録、そしてモーツァルトが1784年春からウィーンで付け始めた自作品目録が大きな手がかりとなります。

「現在明らかにされている手紙を使つての講座」では、モーツァルトの生涯を幼年期、少年期、青年期（マンハイム、パリ）、そしてウィーンと分けました。それぞれの時代背景を説明しながら、楽曲を紹介し演奏しました。その背景になった彼の姿を手紙から探るという講座でした。

私はこの講座で、75人の受講生を対象に、最終日にアンケートをとりました。受講生は、モーツァルトになんらかの興味を持った、20代から80代までの人たちです。

「モーツァルトの曲が好きですか」、の問に、78%の人がモーツァルトが「好き」、22%の人が「曲による」と答えています。そして私は演奏をしました。「どの曲が心地良いと感じましたか」の問いには、1位がキラキラ星変奏曲、ついでヴァイオリンコンチェルト第3番でした。

理由として、口ずさみやすいメロディー、軽快なリズム、心が落ち着く、などがあげられます。「心地良さ」の点では、ハーモニーがなごませる、澄んだ音、優しさ、親しみやすさが答られていました。楽章ごとの集計では、アレグレットの楽章に1番人気がありました。年代別には、60代以上の方が、カンタービレ楽章を好むのではと思いましたが、実際は、40-50代に緩叙楽章に癒しを求める傾向が強く出ていました。またアンケートの中に、「人間味溢れる所が好き」「人生の一断面を回想させてくれる」といった回答もありました。全体として、モーツァルトの作品を聴いて、「心地良い」、と感じている人がたくさんいらっしゃる事が分かりました。

ではなぜこのような結果が出たのでしょうか？

モーツァルトは、ザルツブルク、マンハイムで天才少年として作曲し、演奏をしていましたが、パリでの母の死後ザルツブルクに戻り、そしてウィーンへと飛び出していきます。そして、ハイドンやヴァン・スヴィーテン男爵に会い、フリー・メイソンに加わり、結婚します。ウィーンでのこうした人生経験は、作曲にも影響していると私は考えています。1つの例として、ヴァン・スヴィ

ーテン男爵との出会いによってバッハを知ったことです。このことにより、彼の作品の世界を広げました。

モーツァルトは、ホモフォニックの技法を用いて、いろいろな試みをしようとしていたマンハイム期から、晩年に近づくにつれ、シンプルなものになっていった傾向があります。

しかしこれは、聴き手がシンプルで心地良いと感じるだけです。楽曲を分析してみると、小節を超えたフレーズが混在し、パッサージュの中に隠れた動機が潜んでいたり、半音階の使用、対位法があちこちに見られます。それらは、バッハの影響です。

(フーガの断片、プレリュード・フーガ K.394 を少し弾いてみます)

これらは、モーツァルトが、フーガを模倣した作品です。

しかし、モーツァルトは、これで満足しません。

ついに、ポリフォニーの複雑なものを、彼自身の 16 分音符の連続、歌うアレグロ等で覆ってしまい、聞き手にさりげなく表現します。それは、さらりと流れ、複雑さを悟らせず、むしろ耳に心地良く聞こえます。

最後のピアノソナタ K.576 では、ついに、アレグロの中に 16 分音符でフーガを隠してしまったのです。

興味深いのは半音階です。(K.511 の初めを弾いてみましょう)

クロマティックは、やはりバッハの影響と思われませんが、私は、半音階は、心の痛みだと考えています。ウィーンで経験した心の襞がクロマティックに託され、曲の中にそっと隠されているように思われるのです。

演奏者にとって、弾くのは音楽的に苦勞しますが、聴き手には、堅苦しさを感じさせない所が、モーツァルトのウィーンでのピアノ作品における大きな特徴だと思います。

モーツァルトは、彼の手紙のなかで、ユーモアを連発します。手紙では、彼の作曲意欲が旺盛なとき、ユーモアがわきでてくるという傾向がみられます。本当に言いたい事をユーモアのベールで覆い隠してしまう表現が多く見られません。

晩年の彼の集大成した作品と手紙は、表現において共通点があると、私は考えています。苦勞を感じさせず、音楽で包み込んでしまう心地良さ、こんな所

にモーツァルトが人々に愛される続ける所以があるのではないのでしょうか。

最後にもう 1 つ、アンケートの中に「ヴァイオリンの演奏が親子演奏でたのしかった、ほほ笑ましかった」という答えが沢山ありました。

「アンサンブル」を楽しむと言う点で、私は、ウィーンの友人から学びました。アパートに遊びに行くと、人が集まり合奏をします。彼の職業は、化学者です。彼はピアノを弾きます。奥さんと連弾もします。バロックフルートでアンサンブルもします。演奏する人もいれば、聴く人もいます。皆さんにも、こういった形で、モーツァルトの作品のアンサンブルを楽しんでいただく事を提案したいと思います。そうすれば、モーツァルトがもっと身近な存在となる事でしょう！